西部劇イメージを利用したポピュラー音楽 の戦争を経た翻訳

永冨 真梨

(要約文)

本報告書では、西部劇イメージを利用したポピュラー音楽が戦前と戦後を経て日本でどのように「翻訳」されたかを紹介する。そして、戦争を隔てた「翻訳」の相違点と類似点を示し、戦争を隔てたポピュラー音楽の歴史叙述の重要性についても考える。戦前の例として灰田勝彦のカウボーイ・ソング「いとしの黒馬よ」と、戦後の例として池真理子の「ボタンとリボン」を扱う。

1.灰田勝彦「いとしの黒馬よ」

灰田勝彦によって歌われた「いとしの黒馬よ」は、日本ビクターから 1937 年 12 月(一説では 1938 年 1 月)に発売された。本楽曲は、1936 年日本でも公開された西部劇コメディー『愉快なリズム (The Rhythm on the Range)』という映画の中で使われた挿入歌「エンプティー・サドルズ」のメロディーをそのまま使っている。歌詞は原曲の西部やカウボーイのイメージを残しながら、梅原しげるによる新たな日本語詞が使われた。

まず、この楽曲にどのような「翻訳」がなれた原本された原本は、アメリカ合衆国で作られた原本ので作られた。中のでは、アメリカ合衆国で作られた。中のでは、アメリカ合衆国で作した。では、ロー・パー・アングでは、1930年代に、のリれカカででは、1930年れたのリれカカがは、1930年れたのリれカカがは、1930年れたのリれカカがは、1930年れたのリれカカがは、1930年れたのリれカカがは、1930年れたのリれカカがは、1930年れたのリれるのが、1930年には、1930年に

さて、日本でも、カウボーイ・ソングは、非常に曖昧な男らしさを発信するポピュラーメディアとして機能していたと言える。この点を精査するため、原曲の「エンプティー・サドルズ」と「いとしの黒馬よ」の歌詞の違いを見ていきたい。

原曲の「エンプティー・サドルズ」では、西部開拓 を進めた侵略者の死に対する鎮魂を主人なき馬に託し、 彼らの過去の栄光を称える。つまり、主人公は、死者へ の悲しみを乗り越え、泣くことはしない。大恐慌後に失 われかけた男らしさを、米国における侵略、近代化を達 成した西部に求め、現在失われつつある「本来の」男ら しさを擁護しているとも解釈できる。一方、「いとしの 黒馬よ」では、「今日も北支の空は」という冒頭の歌詞 からわかるよう、原曲では「過去の栄光」であったアメ リカ西部が、帝国日本の侵略のターゲットである華北地 域に翻訳される。つまり、「いとしの黒馬よ」は、現在 乗り越えるべき目標 (「達成するべき野望」)を聞き手 に提示する。過去の霊に同情しながらも涙は見せない原 曲のカウボーイとは違い、実際に戦いに敗れた軍馬に、 「お国のため」なのだからと、その死に対して「許し」 を請う男性像が描かれる。この「許し」とは、戦争に加 担することを謝罪しそれを正当化する姿勢とも読み取れ る。灰田勝彦は、クロスビーの女性的な歌声クルーニン グを踏襲し、女々しいながらも戦争に積極的に加担する 曖昧な男性像を演じる。えん

私が発表した学術論文で述べたよう、この曖昧なカ

ウボーイの男らしさと、ハワイで生まれた灰田の混血性 は、帝国日本の国際性をアピールするのに都合よく機能 したと解釈できる。なぜなら、日中戦争開始前夜には、 日本の国際的な技術革新が帝国の近代性を象徴するもの として讃えられたからである。しかし、「いとしの黒馬 よ」で灰田が演じた男性像を考えると、このような国際 的男性像は、帝国日本を代表する男性としては機能して いるとは言い切れない。灰田は、純血の日本人男性では なかったからこそ、カウボーイに扮してそのような男性 を演じることができたとも考えられるのではなかろう か。私が博士論文でも示したよう、戦前カウボーイのシ ンボルは、新聞などで下層階級が好むものとして批判さ れていた。灰田によって演じられた下層階級的でアメリ カ的なシンボルであるカウボーイは、当時の人種やジェ ンダーの規範を揺るがしながらも、純血日本人の力強い 男 ら し さ を 覇 権 的 な も の と し て 補 完 し な が ら 、 男 性 的 侵 略戦争を正当化する役割を担ったとも言える。

2. 池 真 理 子 の 「 ボ タ ン と リ ボ ン 」

戦前、灰田勝彦などの混血的な男性によって演じられ広められたカウボーイとアメリカの西部のイメージは、戦後直後には、轟夕起子や、池真理子などの女性歌手によって広く知れ渡ることになる。

ここで、池真理子による「ボタンとリボン」を紹介する。この楽曲は、アメリカで1948年に公開された『腰抜け二挺拳銃(The Paleface)』という西部劇の中で、

男性俳優のボッブ・ホープが歌っている「ボタンガバヒロns and Bows)」というカカセンが、(Buttons and Bows)」というかもしたいます。という女性歌手にはいったというないは、かったないでは、があったが、『SP盤復刻にアルでの楽曲解説シーでは、があったが、ボールののよれがのからないが、ボールののでは、ボールののでは、ボールののでは、ガールののでは、ガーでは、カーでは、カーのでは、カーのでは、カーのでは、カーのでは、カーのでは、カーのでは、カーのでは、カーのでは、カーのでは、カーののので、カーののので、カーののので、カーののので、カーののので、カーののので、カーののので、カーののので、カーのののでは、カーのを戦後日本で、カーのにおけるジェンダーの転覆は興味深い。

る都会へ戻ることを懇願することで、一家の稼ぎ手としての男性の役割と、その稼ぎで消費生活を営むいわば従属的な女性の役割を補完しているとも読み取ることができる。池の「ボタンとリボン」の女性は、結果的に男女の既存の性役割に従うのであった。

同時期、敗戦と連合国軍の占領によって女性化された日本では、女性は、ファシズムからアメリカが率いる連合国によって救われた、先の戦争の妥当性を示すシンボルとして、そして、新しい日本の希望を示す象徴として機能したため、いわば男性的な象徴である想像上の西部、もしくはフロンティアでカウガールを演じることができたのかもしれない。

3.おわりに

本報告書で見てきたように、「いとしの黒馬よ」と 「ボタンとリボン」では、戦前には「西部」が女性的な 男性によって歌われたということと、戦後は男性的な女 性によって歌われたという違いがある。しかし、類似点 も確認できる。例えば、灰田は日系人であり、女性的な 声を特徴とし、日本純血の男性と比べると周縁的な存在 である。また、池真理子は、女性であるという時点で、 国家の舵取りをする男性と比べれば周縁的な存在である し、宝塚女優であり、活発的な女性を体現することを許 された、一般女性に与えられた既存のジェンダー規範を 刺激する存在だった。つまり、アメリカの西部、いわば 粗野で未発達な前近代的かつ、近代的な未来を夢見る想 像の場を成立させるカウボーイやカウガールは、戦前戦 後を通して、男性中心的で中産階級的な近代国家におい て周縁化された主体によってのみ具現化されることが可 能だったということとも言えるのかもしれない。

この戦争を通した類似点は、アンドリュー・ゴ後にいるは、中村政則、成田龍一などが論じているよう、戦望における様々な問題が戦前から続く近代や近代への欲望にになってとを裏付けている。ポピュラー音楽の貫戦史的な叙述によって、近代への欲望がどのように「あたりまえ」なものとしてポピュラー音楽を通して機能していたかを更に批判することへと繋がることを願う。

参考文献

- 「いとしの黒馬よ」『ビクター・レコーディングス②1938~ 1947』ビクター・エンターテインメント、VICL-6290 5~6、二〇〇八年。
- 「ボタンとリボン」『SP 盤復刻による懐かしのメロディー池 真 理 子 愛 の スィング』 日本コロムビア、 COCA-11424、一九九四年。
- 中村政則『戦後史』岩波書店、二〇〇五年。
- 永冨真梨「日中戦争開始前後の日本における周縁的男性像一灰田勝彦のカウボーイソング〈いとしの黒馬よ〉を例として」『戦争社会学研究』第3巻、二〇一九年、一七九一九八頁。
- アンドリュー・ゴードン編 『歴史としての戦後日本』み すず書房、二〇〇二年。
- 山之内靖、成田龍一、ヴィクター・J・コシュマン『総力戦と現代化』柏書房、一九九五年。
- Allison McCracken, Real Men Don't Sing: Crooning in American Culture (Durham: Duke University Press, 2015)
- Mari Nagatomi, "Tokyo Rodeo: Transnational Country Music and the Crisis of Japanese Masculinities," (PhD diss., Doshisha University, 2019).
- Jocelyn R. Neal, *Country Music: A Cultural and Stylistic History* (London: Oxford University Press, 2013)
- Stephanie Vander Wel, "The Lavender Cowboy and 'The She Buckaroo': Gene Autry, Patsy Montana, and Depression-Era Gender Roles." *The Musical Quarterly*, 2012, 95.2-3: pp. 207-251.

「研究科プロジェクト」成果報告書 『文学研究・文化研究の方法とグローバル展開を探る』 (「日本文学を世界文学として読む」第2弾)

令和2年(2020)3月31日発行

編集 堀まどか

発行 大阪市立大学大学院文学研究科 都市文化研究センター 〒558-8585 大阪府大阪市住吉区杉本3-3-138 電話 06—6605—3114 ホームページ https://www.lit.osaka-cu.ac.jp/UCRC/ja/

印刷 博進印刷株式会社 〒559-0002 大阪府大阪市住之江区浜口東2-7-24 電話 06—6678—5151



- 文学研究・文化研究の方法とグローノル展開を!

大阪市立大学大学院文学研究科 都市文化研究センター

2019年度・「文学研究科プロジェクト」成果報告書 「文学研究・文化研究の方法とグローバル展開を探る」

【論文】

慶滋為政の和歌序 ―摂関期の和歌序の特質―

山本 真由子 (1)

『今鏡』と『大鏡』の皇妃描写 —「帝王の寵妃」という人物描写について—

小笠原 愛子 (15)

The Reception of 'A Fairy' in Modern Japanese Literature: 'Changelings' from Irish fairy folklore in Hiroko Katayama's Works

NAGAI Izumi 左(1)

【研究報告】

世界史叙述メディアの新地平 ―学習歴史漫画を超えて―

草生 久嗣 左(7)

ドレフュス事件から見る「ユダヤ」と「文学」

鈴木 重周 左(19)

西部劇イメージを利用したポピュラー音楽の戦争を経た翻訳

永冨 真梨 左(25)

外国人旅行者の意識からとらえた中崎町のイメージ形成

嵜本 圭子 左(31)

文学研究から文化研究へ —「文化構想学」科における教育・研究へ向けて—

堀 まどか 左(41)

研究会報告 (i)

執筆者プロフィール (vi)

大阪市立大学大学院文学研究科・都市文化研究センター(UCRC)